

7-5

演題	主役は地域！そっと寄り添う包括
副題	～まだまだ、若い者にはまけね～ぞ！～

地域と認知症
ネットワーク

法人名	社会福祉法人 敬和会
施設名	厚木市荻野地域包括支援センター

発表者名 (職種)	青木 佳奈 看護師等	都道府県	神奈川県
共同発表者	篠原 千代	住所	厚木市鳶尾 2-25-10
共同発表者		TEL	046-241-5780
共同発表者		FAX	046-242-6188
共同発表者		メールアドレス	ogino-houkatsu@gaea.ocn.ne.jp
共同発表者		URL	

今回の発表施設 またはサービスの 概要	当センターは、厚木市の北西部に位置し自然豊かで、高齢化率は 28.8%と高い。 地元の方、新しく転入されてきた方、障がい者グループホームも多く、多様な相談が寄せられている。 地域に寄り添い「顔の見える包括」を目指しています。
---------------------------	--

研究の目的、PR ポイント

65 歳以上の『5 人に 1 人は認知症』時代が到来。
認知症によって起こる生活上での問題は、本人や家族だけでなく社会課題としても取り上げられている。
認知症になっても“住み慣れた地域で自分らしい生活”には地域住民同士の支え合いが必要不可欠であり、点だけではなく、点と点が繋がるのが地域力を高めるポイントとなる。

本演題は「認知症になっても住み慣れた地域で自分らしい生活」の獲得を目的とし

- ① 認知症に対する正しい理解
- ② 地域ネットワーク構築
- ③ 子ども、障がい者、高齢者の輪が広がり重なり合っていく共生社会の構築のため、地域包括支援センターがつなぎ役として、地域住民に寄り添い、働きかけた、その取り組みと関わり方の一例を報告する。

取り組んだ課題

当担当地区は高齢化率 28.8%、地域によって 40% 超えの住宅地がある。介護保険申請者疾患別では、認知症が平成 29 年 9.3% に対し、令和 4 年 10.4% と増加。新型コロナウイルスの影響で人との関わりが減少し孤立化、家族や地域との生活上のトラブル等、相談件数が増加し内容の複雑さが顕著となる。

認知症サポーター養成講座を開催するも、「認知症を隠したい」と家族、「火事やトラブルを招かれては困るから施設に入れてくれ」と地域住民、認知症に対する偏見や誤解が残っている。また、個人の意識は高いが横の繋がりが少なく地域力に至らない。

上記を踏まえ、総合相談内容のデータ化、地域診断を行い、地域に出向きボランティア活動や地域の実情を把握、課題整理を行い『認知症になっても住み慣れた地域で自分らしい生活』に地域住民が気づき、地域が繋がるような取り組みを行う。

具体的な取り組み

- ① 認知症に対する正しい理解
- ② 地域現状の把握・共有
- ③ オレンジカフェの目的と趣旨説明

- ④ オレンジカフェ『ふぁ～む・まさおさん』結成の支援
- ⑤ オレンジカフェ『ふぁ～む・まさおさん』開始後の支援

活動の成果と評価

- ① 認知症に対する正しい理解
 - ・ ポジティブな可能性や前向きに生きるための気づきの獲得、自身や家族が認知症になった時の道筋になることを習得した。
 - ・ 自分事と捉え、活動の場での思いの共有することができた。
 - ・ 当事者のやりがい等の自尊感情が高まった。
- ② 地域ネットワークの構築
 - ・ 誰でも参加できることで、他の活動団体と繋がった。
 - ・ 人との「出会い」が増え、当事者支援と家族支援を一体的に行うことで、気兼ねなく相談でき、不安が解消され在宅介護の継続に繋げることができた。
 - ・ 専門職が地域と関わり、在宅介護の現状を把握し感じることができた。
 - ・ 介護保険での支援だけでなく、住み慣れた地域で新たな居場所を見いだすことができた。
- ③ 子ども、障がい者、高齢者の輪が広がり重なり合っていく共生社会の構築
 - ・ 若年性認知症の方、家族(20 歳代)の参加があり、ヤングケアラー課題にも成果が広がった。
 - ・ 障がい者グループホーム、特別養護老人ホーム入居者の参加もあり、施設内だけではなく地域に密着した支援となった。

今後の課題

- ・ 地形(横約 6000 m 高低差 188 m)による参加者の移動手段。
- ・ 多種多様なオレンジカフェの設置および地域の担い手、専門職ボランティアの確保が必要。
- ・ チェック表を用いた、定期的な評価や振り返りの実施。

参考資料など

厚木市データ